

## Adorno/Horkheimer の反ユダヤ主義研究 — 「反ユダヤ主義のエレメント」の論理 —

井 上 純 一

### I 「反ユダヤ主義のエレメント」の成り立ち

フランクフルト学派の反ユダヤ主義研究を語ろうとすれば、『啓蒙の弁証法』の第5章「反ユダヤ主義のエレメント」への言及なしには済ますことはできない。当初『啓蒙の弁証法』の構想の中には、「反ユダヤ主義のエレメント」は、なかったという。亡命やドイツ国内でのユダヤ人への差別が強まっていたにもかかわらず、ホルクハイマーの論文「ユダヤ人とヨーロッパ」以外に、アドルノやホルクハイマーは反ユダヤ主義の問題に本格的に取り組むことはなかった。しかもホルクハイマーによる「ユダヤ人とヨーロッパ」は、反ユダヤ主義を、なお独占資本主義との関係でとらえる、旧来のマルクス主義の思考圏をでることがなかった。そのこともあって、この論文について、ホルクハイマーはその後語ることはなかった。むしろ彼はこの論文が公式的で誤解を伴う恐れがあるとの理由から新版を避けていたという<sup>1)</sup>。その「誤解」とは、ショーレムが厳しく批判したように、まだこの段階ではホルクハイマーは、ユダヤ人を権力の対極点にいるのではなく、古くなった権力のエージェントと考えていたからである。そういう意味では『啓蒙の弁証法』の「反ユダヤ主義のエレメント」は、彼らの最初の本格的な反ユダヤ主義研究への理論的取り組みであった。

もともと「反ユダヤ主義のエレメント」は、研究所が委託をうけていた反ユダヤ主義プロジェクトの理論部分として書こうとしたものであった。一方『啓蒙の弁証法』は研究所のこのプロジェクトとは別に、アドルノとホルクハイマーの共同企画として構想されたものであった。したがって「反ユダヤ主義のエレメント」は、『啓蒙の弁証法』とは別のものとして、1943年の夏に二人の共同作業として書きあげられた。「エレメント」の7つのテーゼは、すでに知られているように、最初の三つのテーゼは、レオ・レーヴェンタールを加えた三人の議論にもとづいているが、他の三つのテーゼ、とりわけ第五テーゼや「イディオジnkラジー」、「ミメーシス」の、もっともオリジナルなテーゼは、1943年7月に二人による口述でつくられたものと推測さ

れている。44年版にはなく、戦後の47年版に付け加えられた最後の第七テーゼは、ホルクハイマーの手によると考えられ（アドルノは「覚書」を残しているだけである）<sup>2)</sup>、そして「エレメント」の全体は、ホルクハイマーの下書きにアドルノが手を加えて完成された。

しかし「エレメント」が『啓蒙の弁証法』の当初構想には念頭になかったとしても、また反ユダヤ主義プロジェクトの一部であるとしても、ファシズムの反ユダヤ主義は、彼らをしてユダヤ人の運命が、彼らの研究企画の焦点になると認識させていた。アドルノは「私たちが労働者階級の側面のみでみるのが普通であった全てのことが、今日ではユダヤ人への恐ろしい集中へと移ったかのように私には思えます。・・・私たちが本来言いたいことを、権力の集中の対極点となっているユダヤ人と関連させて語ってはいけないただろうか<sup>3)</sup>」と自問した上で、ホルクハイマーに41年10月の時点ですでに次の様に提起をしている。

「私たちの本を反ユダヤ主義で結晶化させるのは、どうでしょうか。それは、私たちが具体化し限定することを追求してきた、そのものを意味するでしょう。・・・反ユダヤ主義は今日、現実に不正義の重心であり、私たちの描く人相学は、残酷に満ちた顔をしている世界に向き合わねばなりません。<sup>4)</sup>」また同じようにほぼその半年前に、ホルクハイマーも政治学者ハロルド・ラスキへの手紙で、「今では社会は反ユダヤ主義によってのみ適切に理解されることができるようには思えます<sup>5)</sup>」と記している。アドルノとホルクハイマーは、この時点で反ユダヤ主義は酷悪な姿をとって立ち現われている社会を解説する核心的現象だ、と認識している。したがって『啓蒙の弁証法』の構想は、反ユダヤ主義プロジェクトに交差させる形で、「反ユダヤ主義のエレメント」を『啓蒙の弁証法』に組み込むことによって、哲学的な『啓蒙の弁証法』それ自体に現代性と歴史性とを獲得させることができたのである。現代性とは、「反ユダヤ主義のエレメント」の副題で示唆されている、ファシズムにおいて現実的究極に達した「啓蒙の限界」であり、歴史性とは反ユダヤ主義そのものに刻印されてきた歴史的・始原的内容である。このことによって反ユダヤ主義の問題は、文明史（論）的な社会理解の本質としての位置をもつことになる。

一方、反ユダヤ主義プロジェクトである『権威主義的パーソナリティ』との関連で考えれば、「反ユダヤ主義のエレメント」は、『権威主義的パーソナリティ』の理論部分にあたっている。アドルノの回想によれば、『権威主義的パーソナリティ』は、反ユダヤ主義とファシズムを主観的な要因で説明し、政治・経済的現象を心理学化する誤りに陥っているという批判にさらされたが、その誤解の原因は、『啓蒙の弁証法』が英語では手に入らなかったということにある、と語っている<sup>6)</sup>。彼によれば、『啓蒙の弁証法』には、「現代社会における反ユダヤ主義の全体理論の要素」が書かれており、その中で心理学的側面の位置価が正しくはめ込まれている<sup>7)</sup>。

したがって「反ユダヤ主義のエレメント」を挟んで、『啓蒙の弁証法』と『権威主義的パーソナリティ』との関係は、『啓蒙の弁証法』は『権威主義的パーソナリティ』との関係で経験

的に支持されるはずのものであるし、『権威主義的パーソナリティ』は『啓蒙の弁証法』とのつながりなしには理論的に正しく理解することはできないのである。

「反ユダヤ主義のエLEMENT」を書くにあたって、彼らは、マルクス主義正統派の経済主義とは異なり、フロイトの精神分析に接近しているものの、「心理学的要素よりも客観的な要素が優位であるということに疑念を持たせるようなことは決してしなかった」のであって、人種偏見を、客観を志向する批判理論で説明しようとしたものであった、としている<sup>8)</sup>。しかし「反ユダヤ主義のエLEMENT」ではブルジョア的反ユダヤ主義の最終目的は、「ユダヤ人が生産面で支配しているかのように偽装すること」であり、「全階級の経済的不正が彼に背負わされているという包括的な意味において」「ユダヤ人は贖罪の山羊である」という風に語られているが<sup>9)</sup>、ホルクハイマーの「ユダヤ人とヨーロッパ」で出会う当時のマルクス主義的反ユダヤ主義理解がそうであったような、単純な経済優先主義を修正している。ホルクハイマーは反ユダヤ主義の解明の難しさをマルクーゼに次のように語っている。

「反ユダヤ主義の問題は、私が当初考えていたよりも、はるかに複雑です。経済的・政治的要素は反ユダヤ主義の原因でありまたそれを利用していきなり、権威主義的要素をもつ現代人のタイプは他の抑圧的刺激に対すると同じように反ユダヤ主義のプロパガンダに応答するのですが、こうした経済的・政治的要素と権威主義的要素をラディカルに区別せねばならない一方、他方では、私たちはこれらの要素が相互に関係しあっていることを示して、それらが相互に浸透していることを述べなければなりません。<sup>10)</sup>」

この「ラディカルな区別」と「相互関係・相互浸透」が、「反ユダヤ主義のエLEMENT」の人間学的、社会学的、心理学的及び経済学的なパースペクティブになっており、いっけん非体系的な構造として組み立てられてはいるものの、反ユダヤ主義の理論全体の「要素」を構成している。そして「唯物弁証法の素性を隠していない一方、その正統派からはすでに離れている<sup>11)</sup>」ことをアドルノは自認している。

## II 七つのテーゼで語られるもの

このようにして成り立っている「反ユダヤ主義のエLEMENT」の七つのテーゼに貫流しているのは、そもそも憎しみとなる対象の特性が客観的、合理的な根拠をもっていることとは無関係に、反ユダヤ主義は成立しているということである。だから反ユダヤ主義は、近代社会及び個人の単なる精神病理的逸脱として理解されるのではなく、社会それ自身を正しく理解することができる構成原理の問題とみなされている。したがって社会化と支配の様式を認識することによってのみ、反ユダヤ主義は社会的事実としてその根源から解説できるのである。

第一テーゼで語られるのは、市民的主体・市民的理性・近代市民社会の本質的な虚偽性であ

る。反ユダヤ主義は人種の特徴とはかかわりなく、宗教的心情や伝統によって市民社会に同化をしないユダヤ人（主に東方ユダヤ人）にのみ向けられるという、自由主義的反ユダヤ主義テーゼは、市民社会において「人類はひとつだという理念が実現済み」のものだと考えることによって、そうした理念に従っていないひとびとを、市民社会の幸福な秩序を毀損するもの、秩序の不安定要因だとみなす。一方「ユダヤ人は単なるマイノリティではなく敵性人種」であるとする人種主義的ファシズム反ユダヤ主義は、ユダヤ人の存在そのものを絶滅することが「世界の幸福」だとする。

市民社会へ同化をすれば反ユダヤ主義はなくなるとする自由主義のテーゼと、同化の有無を問わないファシズムのテーゼは、いっけん異なった主張に見える。しかし彼らは、両者は「ともに真実であるとともに誤りである<sup>12)</sup>」と言うことによって、両者の直接的な関係を示唆する。自由主義的テーゼが真実であり誤りであるのは「人類はひとつ」という真実を「実現済み」と考える誤りである。ファシズムテーゼは、絶滅を実践する絶対的悪という誤りによって「人類はひとつ」という真実の実現をはかろうとする。ファシズムは、ユダヤ人を絶滅することで、「人類はひとつ」の市民的平等の理念とその非現実という、自由主義が止揚できていない矛盾を止揚する。だからファシズムテーゼは、野蛮な集団のうちに統合された市民的個人の自己主張なのである。ファシズム的反ユダヤ主義が社会秩序を歪めるのではない。「人類は一つ」という市民社会の虚偽の社会秩序が、人間を歪め、ユダヤ人の絶滅意思を創り出すのである。啓蒙の市民的理性は自ら反ユダヤ主義を生み出し、「啓蒙の限界」は秩序の本質としての「暴力」を露わにする。

第二、第三テーゼでは、反ユダヤ主義の社会・経済的根拠が取り上げられる。中世にはユダヤ人居住地は略奪され、ナチスはユダヤ人の財産を「アーリア化」した。しかし大衆現象としての反ユダヤ主義は、広範な大衆に経済的利得をもたらすことはない。にもかかわらず反ユダヤ主義は資本主義の経済システムの中で、労働者の側からも、資本の側からも「意味」をもつ。

労働者は、資本主義経済システムの中では剰余価値の分け前を欺かれる。資本主義は何よりも、「ユダヤ人が生産面で支配しているかのように偽装する」のだから、反ユダヤ主義は、自分たちの正当な分け前を「踏み倒された大衆」の怒りの表現となる。大衆は、正当な分け前を手にはできない自分たちの状態の責任を求めて、資本の代表者を流通領域の舞台に発見する。「創造的資本」から手にした貨幣が、いかに少ないかを、大衆は流通領域の中で実感する。自分たちが手にするものが、ミニマムにすぎず、約束された幸福な生活には程遠い。大衆が欺瞞に気づいたとき、眼の前に見えるのは流通領域での「貨幣とモノ」との交換者・媒介者である「搾取的資本」である。「搾取の責任が流通の領域に負わされるのは、社会的に必然的な仮像<sup>13)</sup>」なのである。それは、「支配者の役割が、マルクスが考えたように、生産における位置と関係しているよりはむしろ、分配における位置と関係している<sup>14)</sup>」からである。

この時点で大衆にはユダヤ人商人、仲買人、銀行家等々が眼に入る。しかしアドルノやホルクハイマーは、ユダヤ人が流通領域の中で特別な影響をもっていると言うのではなく、ユダヤ人が「保護を失った」ことに注目する。ナチスのイデオロギーでは「創造的資本」は社会的生産や肉体労働を連想させ、「搾取的資本」には、非労働、強欲が結びつけられたが、ステレオタイプな反ユダヤ主義は、昔から非労働や強欲をユダヤ人と結びつけてきたので、「搾取的資本」の代表者はユダヤ人になる。だからユダヤ人は、自由主義的市民社会における「特殊」な存在として目立つだけでなく、大衆にとっての不正義な経済システムの代表者、経済的不正義の責任者としても際立つのである。このことが「憎しみ」をユダヤ人に引き寄せ、「搾取的資本」のユダヤ人だけでなく、すべてのユダヤ人が「贖罪の山羊」として共同責任を負わされるのである。大衆レベルの反ユダヤ主義は、かれらの憎しみ、憤怒を聖化することに利得を感じるのであって、それ以外に得るものがなくとも「民衆にとっては、反ユダヤ主義はひとつの贅沢<sup>15)</sup>」なのである。このように反ユダヤ主義は、労働者の側では、経済的抑圧によって生じるフラストレーションの排水溝として役立ち、資本家にとっては、大衆の目標対象から自分をそらさせ、支配を安全なものにする。

第四テーゼは、現代社会における宗教の意味にかかわる。現代社会では伝統的な宗教的反ユダヤ主義（例えば「ユダヤ人」がイエスを殺した）の訴えは、直接的には社会的訴求力をもたない。しかし民衆の反ユダヤ主義はその宗教的起源を否定しているものの、宗教的起源とまったく無関係になったのではない。キリスト教のもっていた宗教的熱狂とかユダヤ人憎悪といった部分的要素が文化一般へ浸透し、そこで生きながらえる。『『ドイツキリスト教徒』のもとで愛の宗教のうち残されたもの』については反ユダヤ主義以外に何物もない。<sup>16)</sup>」反ユダヤ主義の宗教的起源は、密やかに大衆文化の中で維持され、ファシズムによって活用される。文化へ密かに隠棲するユダヤ人への憎悪は、キリスト教がユダヤ教よりも進歩した宗教であり、それゆえにキリスト教は文明の進歩・真実の象徴であるはずなのに、ユダヤ教の中に逆に真実が嗅ぎつけられるからである。

ユダヤの神は、全てを支配する最初の神であり、全能の神である。ユダヤの神は、自然の中の超越的存在ではなく、自然そのものの創造者になる。人間には、ただ一人の神があり、彼が全てを支配する。そのことで、自然への恐れは軽減し、自然は全能の神の創造物に「すぎ」なくなる。自然宗教と比較すると、この進歩は、同時に永遠、無限、絶対なる創造者に対する信仰者の畏怖を強め、自然に対する支配を購うために、「精神」の完全な力を承認することが根本的な原理となる。そして「偶像崇拜の禁止」によって、描くことのできない神（という精神）と、あらゆるものを説明する啓蒙（という精神）への願望との緊張が維持され、神を現実の場で説明することを禁止するそのことによって神は全能であり続ける。

キリスト教では、この禁令は破られる。一方では神、他方では人間という二重像として祭ら

れるイエス像を前にすることで、永遠のもの、無限のもの、名前で呼べないもの、観念できないもの、絶対的なものが現実世界へもちこまれる。ユダヤ教で維持された緊張は破壊され、「絶対者が有限なものに近づくにつれ、それだけ有限なものは絶対化される。<sup>17)</sup>」文明による理性の支配は、自己保存の原理を克服したイエスの学びにならった救済知であり、そこでは「自然と超自然が宥和している」ことになる。

しかし、このキリスト教的救済知は欺瞞である。なぜならキリスト教では救済は保証されないからである。文明による理性の支配の欺瞞性は、ひとびとにうすうす感じられている。キリスト教徒にできることといえば「曖昧な気持ちで理性に犠牲を捧げなかった人々の現世での不幸を引き合いに出して、自分たちの永遠の救いの証<sup>18)</sup>」とすることである。だから「父の宗教の信者たちは、息子の宗教の信者たちから、この間の事情をよりよく知っている者として憎まれることになる。<sup>19)</sup>」文化に沈潜する反ユダヤ主義は、理性の支配の欺瞞性を頑なに告発するように見えるユダヤ教への「怒り」なのである。

第五テーゼと第六テーゼは心理的側面にあてられ、フロイトの精神分析が援用され、「イデオジングラジー（病的憎悪）」「誤った投影」「パラノイア」が、「ミメーシス」と結びつけられている。

イデオジングラジーは特殊なもの、一様でないものに、その憎悪を向ける。それは一般的なもの、社会的に順応するものを自然的とみなすからである。だからイデオジングラジーの契機は、自己保存のアルカイックな形式であり、反ユダヤ主義からの社会解放はこのイデオジングラジーを克服することである。イデオジングラジーは、コントロールできない自然の最後の要素としてのミメーシスであって、ミメーシスの最後の隠れ家でもある。技術文明は人間の行為はコントロール可能なものとし、合目的な強制力となり、そこではイデオジングラジーも操作可能に見えてくる。文明の過程においてミメーシスは組織的に管理され、ミメーシスは管理・組織された労働として合理化される。元の形のミメーシスへ後退しないことが、文明の基礎である。ミメーシスへの後退の禁令は、現代社会では全体的なものとなり、もはや意識的には実行されることはない。

反ユダヤ主義の基礎としてのイデオジングラジーは、自己のミメーシス活動ができないことに向けられる。市民的主体は、他者に対して、否定されたミメーシス活動に向け、既知の嫌悪的である他者を指弾して自分の嫌悪を根拠づける。攻撃衝動は、人類が文明過程でそれ自体に行った、個人的、集団的自己抑圧の反応である。他者へのこの活動の投影によって、自己の行為は合理化され、ミメーシス的活動は復権する。反ユダヤ主義のイデオジングラジーは、現実原則を損なうことなく、ミメーシスを可能にする。すなわちミメーシスのミメーシスなのである。文明の支配的労働秩序に背く、タブー化された衝動は、画一化されたイデオジングラジーへ転化する。抑圧された衝動が水路づけられ、支配に有用となる。この過程がファシズ

ムにおける全体主義の基礎であり、ユダヤ人が必要となる所以である。

しかし何故ユダヤ人なのか？イデオジnkラジーには二つのタイプがある。第一のタイプは、恐怖に面して仮死を装う硬直、つまり生きるものが死んだ自然に自己を似せるというミミクリー（擬態）、第二のそれは「硬直のような反応がなお存在した状況への憧れ」つまりミミクリーへの憧れである。反ユダヤ主義的イデオジnkラジーは、この第二のタイプに属している。「反ユダヤ主義とイデオジnkラジーは両方ともミミクリーの禁令である。<sup>20)</sup>」ユダヤ人は「同化」という一種のミミクリーを装う。しかし幾世代の「同化」を通じてもなお、ユダヤ人は、その生活や仕草や仕事に「恐怖」の痕跡を残している。そのことによってユダヤ人は文明によって失われたもの、抑圧されたものを人々の目の当たりにさせる。それをアドルノとホルクハイマーは「洗面」という表現をしている。そうした「洗面」を見るにつけ、「憧れ」は掻き立てられ、その「憧れ」への反作用として攻撃衝動がユダヤ人に向けられるのである。

第六テーゼで扱われるのは、「虚偽の投影」と「パラノイア」である。アドルノとホルクハイマーによれば、知覚とは、主体の感覚的印象を、対象に投影することでありたっている。それは先史時代からの遺産であり、それによって対象の意図に関わりなく主体は対象に反応する。実際あるかないかにかかわらず、対象がある志向や動機を持っているとするのが、知覚の一つの機能であり、その原動力は、脅威があると主体が感じる対象の意図に対する不安である。主体の知覚と対象の本質との間には深い亀裂があり、「主体は自らの責任でそれに架橋しなければならない<sup>21)</sup>」動物的な先史の時代には、それは、脅威から身を守る自己保存の意味で、近代社会の理性では自己及び他者の認識という意味で、架橋される。投影とはこの営みである。本来の投影とは、自己自身の限界を明確に認識しながら、対象の本質への「架橋」がなされるものである。そこでは自己自身への反省と対象そのものへの反省という二重の反省によって投影は構成されなければならない。

しかし虚偽の投影は、こうした反省を失った投影であり、対象の反省も自己自身への反省もしないがゆえに、そのことによって主体は「自己と対象との区別をする能力を失う<sup>22)</sup>」。反省の喪失によって主体は自己自身の限界を知らないことになり、主体は盲目の主体として、反省のない投影によって、自らの不安と矛盾を外的世界へ、とめどもなく移転する。「ミメーシスが自己を環境に似せるものだとすれば、虚偽の投影は自己に環境を似せる。<sup>23)</sup>」それは真のミメーシスの反対、ミメーシスの精神病的変種である。

反ユダヤ主義とは、こうした虚偽の投影であり、反ユダヤ主義の病理とは、反省の欠落であり、それ故にパラノイアなのである。自己の抑圧された衝動は、外部の対象、可能な犠牲者に刻印・投影される。「脅迫に駆られて投影する自己は、自分の不幸以外の何ものをも投影することはできない。しかもそういう不幸の本来の根拠は、反省能力を欠く彼にはまったく遮断されている。<sup>24)</sup>」

パラノイアは、自己の「妄想」に対応する環境を真実だと受け入れる。支配によって抑圧される現代のパラノイアの主体は、反省能力を欠くが故に、ナチスのような上からの「指導」によって、より大きな妄想、迫害妄想に駆り立てられる。パラノイアの主体は、自己の「妄想」に占拠されているので、敵がいなければ敵を見つけ出す。「敵として選び出された者は、それ以前にすでに敵として知覚されていたのだ。<sup>25)</sup>」「敵」として指定されるのは「権力」をもっていないにもかかわらず「幸福」である集団、アルカイックなもの痕跡を今なお匂わせる集団、それがユダヤ人である。ユダヤ人を迫害することで病的な結末は強まる。反ユダヤ主義者は「否定的な意味で絶対的なものを自分の力で実現」し、「世界を地獄に変える。これまでもずっとそういうものとして見なしてきた通りに。<sup>26)</sup>」それ故に解放とは、本来、虚偽の投影に反対する運動である。支配された者が「妄想」の意味を意識し、自分自身を反省つまり支配できる場合に虚偽の投影は停止する。

第七テーゼは、「反ユダヤ主義者などはもはや居はしない<sup>27)</sup>」というテーゼで始まる。ファシズム崩壊後の47年に付け加えられたこのテーゼは、「もはや反ユダヤ主義者はいない」と言うことによって、反ユダヤ主義者が存在しなくなったことを意味しているのではない。「もはや反ユダヤ主義者はいない」のは、逆説的に反ユダヤ主義が「続く」ことと同時に、それが「なくなる」ことを指している。この論理を可能にするのが、「チケット思考 Ticketdenken」である。

アドルノとホルクハイマーが、この概念を転用してくるのは、1940年代のアメリカの選挙制度からであり、「チケット思考」のチケットとは、政党のリストに載った候補者が、政党の得票数に応じて上位から当選していく、衆議院選挙の比例代表制度に類似の被選挙人名簿を意味している。この方式では、被選挙人個人の名前を書こうが政党の名称を書こうが、選挙人は政党の被選挙人名簿に投票するのであって、候補者個人の個性や考えや政策や政治活動を斟酌しても無意味であり、候補者の「個性」の差異は、無視される<sup>28)</sup>。ここから「チケット思考」は、対象の個性・差異を認識せずに、一様に画一的な見方をするステレオタイプ思考を意味するものとして使用されている。その場合、ステレオタイプ思考というのは、一方では対象をステレオタイプ化し、他方では主体はそうした見方への同化・同調を行う。かつて個人の経験によって満たされていた対象の認識機能を、ステレオタイプ思考が代替するが、その思考は、個人的資質ではなく、社会的メカニズムから生じている。現代の反ユダヤ主義では「大衆が反ユダヤ的な項目を含む反動的なスローガン（原文:チケット Ticket）を受け容れる場合、彼らは、個々人としてユダヤ人とじかに接触することが、何の役割も果さないような社会的メカニズムに従っているのである。<sup>29)</sup>」

現代の経済システムは、主体の個性ある理性的覚醒が経済的機構のスムーズな運転にとって障碍になるため、主体を管理し、主体の理性への介入を要求する。理性は「抑圧」の対象になり、



全体への同化は、理性以上に理性的行為になる。「呪縛を解かれた生産の巨人たちは個人を凌駕してしまった。彼らが個人の満足をすべてかなえてやったからではなく、主体としての個人を抹殺することによって。<sup>30)</sup>」主体としての個人の抹消は、全体への同化という「虚偽の社会化」を通じて、社会的病理ではなく「社会的理性」としてメカニズム化される。『啓蒙の弁証法』の「文化産業」が、ステレオタイプ思考としての「チケット思考」を創りだす、現代社会のメカニズムの一部であることは、言うまでもない。

反ユダヤ主義は、ユダヤ人をいつもステレオタイプに描いてきた。ユダヤ人からは個性が奪われ、反ユダヤ主義は、ポグロムのそれのように、常に同調者を駆り立ててきた。その意味では反ユダヤ主義は、そもそも「チケット思考」であった。社会的メカニズムとして反ユダヤ主義は存続する。

しかしステレオタイプ化と同化・同調だけでは「チケット思考」の説明は十分でない。「チケット」は、候補者リストである。候補者名が入れ替え自由であるように、チケットの項目も「商品リスト」として入れ替え自由である。ファシストは、右から左までの社会的スローガン（商品リスト）を並べ立てたし、ユダヤ人だけでなく、コミュニスト、自由主義者、ロマ、同性愛者、さらに身体障害者などの社会的弱者を殺戮名簿のリストに掲げた。今日の差別のリストに加えられていなくとも、明日も加えられないという保証はない。リストの項目は、その都度支配の風の吹きまわしで付け加えられる。「チケット思考」とは、自由にリスト項目が入れ替えられる、そうした思考でもある。つまりファシズムのチケットが反ユダヤ主義であるというだけでなく、「差異への憎しみ」を伴う「チケット思考」そのものが反ユダヤ的なのである。しかし同時に反ユダヤ主義が入れ替え可能なリストの項目として現れるということは、犠牲者もまた代替可能だということを示唆している。それは、「いつかは反ユダヤ主義もなくなるであろうという希望に、争う余地のない根拠を与える。<sup>31)</sup>」だが一度リストに掲載された項目は、掲載をはずされても消しがたい痕跡を残すように、「いつかは」という「希望」は、文明史の痕跡を反省的にたどることによって反ユダヤ主義の闇の向こうにほのかに見えてくる。

以上が「反ユダヤ主義のエレメント」の七つのテーゼによる反ユダヤ主義の解説である。これらは、体系的に叙述されているわけではないし、相互に関連性をもたせられて書かれているわけでもない。しかし、彼らはむしろこのようにエレメントとしてあげることによって、反ユダヤ主義が一筋縄で説明されないし、安易に解消が目指せるものでもない、ということをもより鮮明にさせるのに成功している。この困難さの向こうに微かなる「希望」を見出すのが、批判理論の「批判」たる所以であるが、それは「反ユダヤ主義のエレメント」の二つの底流によっている。一つは、反ユダヤ主義のアルカイックな起源への遡及による認識の根源であり、もう一つは、30年代の正統派的マルクス主義から分かれる新しい展開である。この二点について考察をすすめてみよう。

### Ⅲ 反ユダヤ主義のアルカイックな起源

『啓蒙の弁証法』で神話から啓蒙への船出の「記録」として、オデュッセイの物語が取り上げられた。ホメロスの神話物語それ自体と合わさって、彼らの解釈するオデュッセイは、彼らの理論を構成する人間発展の抒情詩として、この著作の類まれな魅力になっている。しかし当初彼らの頭にあったのは、オデュッセイではなく、オイディプスであったという<sup>32)</sup>。

主体と所有と権力の同一性をもつ人物として、オイディプスもまた、そうした人物像に適っている。自己のアイデンティティを求める旅の途上で、スフィンクスの謎に「それは人間」と答えることで疫病をはびこらせる自然の猛威を減らし、所有と権力を手中にするオイディプスは、自己のアイデンティティの追求の結果としての真実の前に、悲劇的結果を招くことになるが、そのテーマはフロイト以来、しばしば取り上げられてきている。

しかしホルクハイマーとアドルノにとっては、オイディプスは神話から啓蒙への市民的主体の形成の「物語」としては、十分でなかった。なぜならオイディプスは自己の「自然」的運命に対して無防備で盲目一彼は真実に達したことで眼を貫くが、それは彼の運命に対する盲目性の表象である一であったからである。彼は結局自分の英知で自然に立ち向かうのではなく、ただ自然の中で、その力のままに漂う英雄的人間であった。アドルノとホルクハイマーが市民的主体の形成に求めようとしたのは、奇計や欺瞞をも使いながら、盲目的運命（自然への同化）を逃れて、主体と所有と権力を我が手にすることであった。だからそれにはオイディプスでなく、オデュッセイでなければならなかった。彼は運命（自然）に果敢に挑戦し、運命（自然）すらその手中にしたかのようにであったからである

同時にこの「本源的」市民的主体である神話の英雄オデュッセイは、その影にユダヤ的要素をもったものとしても描かれている。漂流するオデュッセイそれ自身は、すでにアハスヴェルス (Ahasverus)、放浪するユダヤ人のヘレニズム的姿を垣間見せる。オデュッセイは、「詭計に富み」「仲介者 (Mittelman)」であり、その「啓蒙化された言葉」によって「災厄」を「自分自身の上に招き寄せる<sup>33)</sup>」それは、ユダヤ商人のステレオタイプを示唆している。オデュッセイのセムの要素は、「悲愴な乞食姿に身をやつしながら、この封建領主の相貌のうちには、……東方商人の面影がある<sup>34)</sup>」としても描かれる。だから「反ユダヤ主義のエレメント」の中で、ユダヤ人が「最初の市民」と書かれるのは偶然ではない。<sup>35)</sup>

だがオデュッセイが体现する「根源的」な市民的主体である「最初の市民」は、まだセムの要素を持っていたという点で「幸福」であった。市民的主体は、この「根源的」な市民的主体がもっているセムの要素を、もはや失っている点に彼らの「不幸」、あるいは彼らの「憎悪」の芽を育ませる。

『啓蒙の弁証法』の著者たちは、反ユダヤ主義は、目的のための手段ではなく、それ自体自

律的な自己目的をもっていると考えている。それは合理的な政治的経済的な説明を越えるものをもっている。何故ユダヤ人に対する差別なのか。ジンメルの「異邦人」の概念は、差別の社会学の一つの有力な概念ではある。しかし著者たちにとっては、ジンメルのこの概念では、「異邦人」が一般に差別されるということを指摘しても、無数の異邦人の中で何故ユダヤ人が憎しみの対象になるのか、何故ユダヤ人が憎しみを引き寄せるのか、の説明をすることはできない。アドルノは、ホルクハイマー宛の手紙(1940年9月18日)で次のように述べている。「ユダヤ人に対する憎しみの深さとしつこさは、通常多少なりとも合理主義的な、反ユダヤ主義の説明を不十分なものと思わせる。反ユダヤ主義は、その成立の『合理的な理由』の多く一例えば資本主義や自由主義へのユダヤ人の関与一がまだ機能していなかった時期以前からあったという理由から不十分だということではない。反ユダヤ主義それ自体は、通常言われる原因を越えるような、ある種のアルカイックな特徴をもっている。特に反ユダヤ主義は、その成立の『合理的な理由』の様々な論拠でもびくともしないというのは、非常に古い、ずっと以前に第二の自然になった動機が働いているにちがいないということを示唆している。<sup>36)</sup>」したがって反ユダヤ主義の理論が成功するのは、反ユダヤ主義の「原史」を説明することにかかっている。しかしそれはフロイトのように心理学的なものではなく、アルカイックではあっても社会的現実の動きの中に、その起源を見出されるものではない。

そこでアドルノはその説明を聖書の中に痕跡をみいだす。聖書中の「出エジプト」の記述、「乳と蜜の流れる約束された土地」—そこはパラダイスである—、そしてユダヤ王国の短期的運命、それらは、人類史の初期の段階でユダヤ人が遊牧生活から定住生活への移行に抵抗し、遊牧生活に固執し、定住の疑似形態を装ったことを示唆している。ユダヤ人はアルカイックな生活形態を守ろうとしたのだ。ユダヤ人がディアスポラの中で滞在先の神々を受け入れることを頑強に拒否したのも、彼らが範囲の決まった故郷を拒否することにかかわっている。彼らは世界が定住の時代に入った後もなお、はるか以前の遊牧の痕跡を残している。しかも「乳と蜜の流れる土地」は、彼らの未だ見ぬ故郷であり、ユートピアであるが故に、故郷への一層強い欲求を生み出す。「ユダヤ人は歴史の秘密のジプシーである。<sup>37)</sup>」だからそのことに反ユダヤ主義的感情は敏感に反応する。故郷への強い欲求は、同化ユダヤ人の態度の中にも現れる。アドルノは、解放後の同化ユダヤ人が示すキリスト教徒以上に強い「祖国」ドイツに対する憧れに反応するドイツ人の気分を、1933年にハイキングで遭遇した二人の女性教師の会話から読み取っている。「あそこにユダヤ人がいる。彼らは全てのものが自分たちのものだと考えているのよ。」「彼らは一体ここで何をしようとしているの?」それは、ユダヤ人が同化しようとも、その存在そのもので自分の故郷にいる人の感情を害し、ユダヤ人に対して「お前たちは故郷にいるのではない!」という感情に掻きたてられる。<sup>38)</sup>

遊牧生活の放棄は、人類に課せられたもっとも困難な犠牲の一つである。放浪の民「ジプシー」

が近代社会の束縛や近代資本主義的な意味での労働の強制とは無縁の生活を望むように、定住するということには、労働という概念がまわりついている。労働は、フロイトやマルクーゼが指摘するように不自由で、欲動の断念とフーコー的な意味での規律化を要求する。定住がもたらしたものは、労働を人間活動の最優先にすることであった—もっともそれによって計画的に富を増加させることができたのであるが。故郷イタケーに帰国したオデュッセイの支配者としての姿のように、定住生活は、支配と服従関係を永続化し、労働を永続化し、したがって欲動の断念を永続化する。

それに対してユダヤ人のイメージは、労働を知らなかった状態の人類のイメージである。それは幸福の最も古いイメージである。ユダヤ人は文明化—定住と労働は文明化の過程である—せず、労働の優位を認めない。彼らはこの古いユートピアを捨てようとしめない。彼らはまだ、パラダイスから追放されていない可能性を持っているかのようにみえる。ユダヤ人は自分たちのもたない幸福をもっている。それは、階級社会での、労働世界での、「躓きの石」である。憎しみの原因として描き続けられるユダヤ人の寄生的、篡奪の性格は、如何に合理化されても、労働を知らない者への憎悪の表現である。労働の優位に背を向けるものは、文明世界の存立そのものを危うくする。定住の世界が、労働の世界として抑圧を再生産すればするほど、それにあわせて古い状態が幸福として一層浮かんでくるにちがいない。しかしそれは許されるべきではなく、その考えは「禁止」されねばならない。この「禁令」こそ、反ユダヤ主義の「起源」になる、とアドルノは指摘する。「ユダヤ人の追放は、パラダイスからの追放を行う、あるいはそれを模倣する試みである。<sup>39)</sup>」文明の犠牲を払っていない者への、現実的犠牲の要求が、反ユダヤ主義であり、「啓蒙化された」人間の第二の自然として、パラノイア的憎悪を生み出す。

#### IV 反ユダヤ主義の社会的構造

『啓蒙の弁証法』がホルクハイマーの盟友であるフリードリッヒ・ポロックの50歳の誕生日を祝って研究所の謄写版タイプ印刷で44年に印刷され、47年にアムステルダムから出版されたのは知られている。<sup>40)</sup>しかしポロックに捧げられている意味は、単に儀礼以上のものがある。『啓蒙の弁証法』、とりわけ「反ユダヤ主義のエレメント」に展開されている資本主義社会像は、ホルクハイマーが、かつて「ユダヤ人とヨーロッパ」で描いていた、マルクス主義的資本主義社会像とは、明らかに異なる姿を現している。そこにはポロックの考え方に濃厚に影響をうけていることが読み取れる。

ポロックは研究所内部で30年当初から一貫して資本主義の展開の研究を主導してきた。<sup>41)</sup>彼はマルクスにならって、生産力と生産関係の矛盾の増大が資本主義システムを脅かすものだと考えていたが、経済危機の経過の中で、自由主義的資本主義は市場の危機を規制することが

できず、計画経済という新しい経済秩序に移行すると考えるようになった。もっともこれも、古い経済秩序の中ではぐくまれてくるので、その限りでは従前の経済秩序の前進的發展とみなした。そしてそれは、生産手段の私的所有におお基礎をおく計画経済と、生産手段の社会的所有に基づく計画経済の二つの形態で可能だ、とポロックは考えた。彼によれば、崩壊するのは資本主義ではなく、資本主義の自由主義的段階なのである。彼はこれを、40年代に入って、こうした生産手段の所有形態の違いを越えて、「国家資本主義」という概念で把握した。<sup>42)</sup>それは、経済秩序の全体主義的形態であり、「産業界、国家、政党からでてくる指導官僚層の融合」による新しい支配層を形成するのである。例えば国民による国家装置の統制がまだ可能であるようなアメリカでも、民主主義的形態をした国家資本主義であり、それは全体主義の変種でもある。そこではすでに生産手段の私的所有の意味は消え去り、資本は国家行政に強く支配される。経済の自立性はなくなり、経済は管理行政の問題になる。経済領域は「静的」になり、そこからは社会的変化は生み出されず、すべてのイニシアチヴは政治から発せられる。生産関係と生産力の緊張は、生産関係と分配の緊張に置き換わり、政治が経済に優位になるシステムは、分配をめぐる緊張の中にたちあられ、意識的な配分と統制が新しい支配層の任務となる。同時にそれはまた、支配層の間に分配と統制をめぐる新しい闘争を引き起こす。こうポロックは考えた。

研究所内ではナウマンのように、こうした考えを批判する者もいたが、ホルクハイマーは「ユダヤ人とヨーロッパ」でとっていた生産関係と生産力の矛盾という立場から離れて、ポロックのこの国家資本主義概念を受け入れた。彼は、40年春に執筆し、42年の社会研究所の『ベンヤミン追悼』に載せた論文「権威主義的国家」の中で、独占資本主義から国家資本主義への移行は、国家による生産と流通機構の領有をおこなうブルジョア社会の最後の姿であり、国家資本主義とは、現代の権威主義的国家であると論じ、政治が経済に優位な国家として、「支配的徒党 (Clique)」が支配する国家だとした。<sup>43)</sup>ホルクハイマーは、この「支配的徒党」の考えを、43年の「階級関係の社会学によせて *Zur Soziologie der Klassenverhältnisse*」において「ラケット (Racket) 理論」として展開している。<sup>44)</sup>そしてこの「ラケット」は、『啓蒙の弁証法』の中で、しばしば支配関係をあらわす用語として使用されている。そこでは階級概念や支配階級に代えて使われている。<sup>45)</sup>

ホルクハイマーは、ポロックの分析を下敷きにして、マルクスの階級は「競争資本主義」のもとで機能するのであり、「独占主義的資本主義」構造の分析には、「ラケット」、すなわち権力を執行する排他的な徒党 (クリーク) の概念で支配関係を説明するのが適切だとしている。国民の生活と法体系が、自律した独立の経済主体間の自由な競争によっていた時代とは異なり、「独占主義的資本主義」の時代には独立の経済主体に代わって、集団としての資本家のもとに包摂される支配権力が、国民の生活と法体系を直接的に支配する。今や個々の資本家がいるの

ではなく、集団としての資本家が存在するのである。この時代には独立した経済主体の個性はなくなり、集団的個性が強調される。この集団としての資本家が、支配階級としてその機能をはたすことになる。

けれども集団としての資本家とは、一つの統一的な経済的集団というものではない。政治的、文化的、社会的な集団を含んでいる。社会的権力が、その保持者たちの機能的ヒエラルヒー構造によってなりたっているからである。このヒエラルヒーは、肉体的強弱のような自然の力の序列にもとづいて築かれるのではなく、社会的分業システム内の「地位」にもとづいて権力が分配されている。ラケットをクリークと呼ぶのは、権力執行の集団だからである。

それゆえ社会的地位は、そこに属する者に、それに相応する権力の行使を行わせ、権力の執行そのものは、その地位の保持者が執行する限り正統だとみなされる。社会的地位は、第二の自然＝社会的自然なのである。社会的権力を、そうした地位の保持者たちで造っている諸集団が握っていることになり、これらの諸集団が全体として集団としての資本家を構成し、支配階級を形成している。諸集団は、それぞれ彼らの特権的な権力が分業システムにもとづいた正統なものであるのだから、自分たちの独占権を危うくするような変更を押し止めようとする。こうした集団を「ラケット」とホルクハイマーは名づけている。

したがって支配階級とは、社会的分業システムから構造化されてくる諸ラケットの集まりのことである。ラケットのもつ機能は「保護」であり、「閉鎖」である。「保護」とは、自分たちの特権の「保護」であり、同時にそれによって下層の者を「保護」しているという口実である。自分たちの権力執行によって、下の人の生活は守られ、その権利が保障されるというわけである。「閉鎖」とは下のラケットからの上昇を拒否もしくは障壁を設けることである。それには、学歴や資格あるいは財力や門閥、人種が「閉鎖」の手段となる。しかしこの「閉鎖」は、完全な閉鎖ではない。常に下の者たちに「開かれ」てもいる。そのことによって、ラケットは新しい血と知を取り込み、活性化するのである。

こうした諸ラケットから構成される支配階級が、内部矛盾を抱えて相互に「競合」しあいながらも、全体として共同して下層を保護し同時に抑圧する構造をつくっている。「支配の統一化と支配階級との関係は常に複雑である。<sup>46)</sup>」これが「独占主義的資本主義」にかわった資本主義なのである。

「独占主義的資本主義」の段階では、労働者階級もこの構造化を免れることはない。労働組合も「独占主義的に組織される<sup>47)</sup>」。組合指導者は労働者のマネージャーとなり、労働者の売値を高め、宣伝し、労働者を操作する。組合指導者は独占資本主義者ではないけれども、労働（賃金あるいは労務の提供）をコントロールしており、大会社の重役たち（経営者ラケット）が原料や機械やその他の生産要素をコントロールしているのと同じことをしている。労働組合の活動は、企業の利潤獲得と同様に、労働力を集団としての資本家へ売りにだす営業活動になっ

ている。労働者の労働力は、工場の技術に従属させられるだけでなく、組合によっても管理され、人間の物象化の過程が、労働組合の中ですら完成する。そこにあるのは、あるカテゴリーの労働者層の労働組合が自分たちの価格を高めることができる一方、他の集団の重みは下がるという構造である。そこに属するものと属さないものとの格差は労働現場の分業システムにみあった当然の帰結のようになる。搾取に反対する勤労者層全体の団結という目標は、勤労者大衆内部の新しい対立によって霧消する。ラケットと化した集団の「支配権力」が、勤労者大衆の間にも成立する。それが不幸なのは、支配権力のラケットが下層にたいしては一致団結するのはことなり、下層のそれは、上への「閉鎖」をこじ開けるためにも、個人的あるいはラケットの抜け駆け的取引となり、一致団結が困難に曝される。その典型的なラケットが「労働貴族」であることは言うまでもない。

ラケットの競合は、生産手段の所有や生産関係あるいは搾取をめぐるものではなく、分配をめぐる競争なのである。分配は、経済的論理によって決まるものでない。分配をめぐる政治的闘争がくりひろげられる。しかしこの政治的闘争は、決して搾取に関する根底的な闘争ではないが故に、常に合意がめざされる。その際のスローガンが民主主義なのである。

だがこのスローガンも欺瞞になる。ラケットは、自分たちの語る民主主義が民主主義であり、ラケットに属さない者たちの民主主義は、遅れをとった愚鈍な民主主義、民主主義を破壊するもの、一步誤れば全体主義に陥るものだとして論難し、ラケットの「民主主義」を擁護するために、文化動員をかけるのである。資本主義が社会主義を、社会主義が資本主義を互いに非難する仕方は、そのようなものである。非難を通じて、ラケットは安定と権益を守るのである。資本主義も社会主義も民主主義からほど遠い。だから民主主義は、ホルクハイマーにとっては、「今なお影のような存在<sup>48)</sup>」にすぎず、ラケットのない社会こそ真に民主主義的な社会となる。

政治的クレークであるラケットの政治的闘争は、分配をめぐる闘争である。解放され市民社会に入り込んだユダヤ人は、経済流通領域の中での〈媒介〉的機能をもってきた。支配者層と被支配者層とのミドルマンとして、上に対しては保護の代償としての下への障壁になり、下にたいしては上への怒りの調整弁として「直接的攻撃的」となる。それが彼らの社会的「役割」であった。しかし現代では、ラケット間の政治的分配闘争で決まる経済的市場には、ユダヤ人の〈媒介的役割〉は不必要になる。この社会ではユダヤ人は用無しになる。ユダヤ人は社会構造的に余剰になり、ユダヤ人のユダヤ人としての「役割」はなくなり、再び「異邦人」に戻りする。こうして、ユダヤ人を市民社会への同化へと組み込んだ資本主義社会は、資本主義の発展的形態変化の結果として再びユダヤ人を社会内から追放し、反ユダヤ主義の口実を社会構造的に準備する。

## VI おわりに

「反ユダヤ主義のテーゼ」は、反ユダヤ主義の他の数多くの文献とは、まったく異なる論点をもっている。それは犠牲者の「代替可能性」という論点である。「チケット思考」では、そのチケットは商品リストと同じように、支配者によって自由に入れ替え可能であるはずだ。ファシズムは、あるいは現代の様々な政治党派も、政治的スローガンのリストに「商品」を追加することができる。今日のリストにないからと言って、明日のリストにもないという約束はない。リスト項目は、社会的状況によって作りかえられることができる。だからファシズムが反ユダヤ主義的なだけでなく「チケット思考」が反ユダヤ主義的なのである。「差異」を憎む「チケット思考」が、そもそも問題となるのである。同時に入れ替え可能なリストという点で、犠牲の対象者も入れ替え可能だということを示唆している。

しかしアドルノとホルクハイマーは「代替可能性」を示唆しているにもかかわらず、なぜ反ユダヤ主義が永遠であるかのように現象することについて、アルカイックな起源へと遡る。アウシュヴィッツの唯一無比性は、この点にある。代替可能であるにもかかわらず、ユダヤ人の絶滅が唯一の目的になるのは、アルカイックな起源へとたどれるからである。

だがこのことは、文明の犠牲者としてのユダヤ人を浮き彫りにはするが、同時にこのことが、彼らの反ユダヤ主義理解を「永遠の神話的世界」に閉じ込めてしまうように見える。

## 注

- 1) Matthias Küntzel, *Keineswegs ein spezifisch deutsches Problem? Goldhagen und das Defizit der Kritischen Theorie*, in: Juergen Elsässer/ Andrei S. Markovits (hrsg.) *Die Fratze der eigenen Geschichte Von der Goldhagen-Debatte zum Jugoslawien-Krieg*, 2001, S.145
- 2) Horkheimer *Gesammelte Schriften* (以下 GS) S5 編者後書き *Die Stellung der >Dialektik der Aufklärung<. Bemerkungen zu Autorschaft, Entstehung, einigen theoretischen Implikationen und späterer Einschätzung durch die Autoren* S.428-429

「反ユダヤ主義のエレメント、啓蒙の限界」：この章については、ホルクハイマーの遺稿には、印刷用のタイプ原稿は見つからないけれども、多くのタイプ原稿のスクラップがあり、その大半に手書きの修正とホルクハイマーの補足がついており、またホルクハイマーの手書きで書きとめられたテキスト文章がある。(MHK: XI 7. 1-17) この手書きのものの中には、グレーテル・アドルノが(口述として)書いた3枚のページがある。それ以外に、書類束には、アドルノの手による若干の手書きの注と、アドルノの6ページわたる上書きされたタイプ印字の「構想」がある。さらにそこには反ユダヤ主義についての二人の議論の記録がある。47年の印刷版に初めて付け加えられた第7テーゼは、ホルクハイマーが手書きで修正し書き足したタイプ印字が、多くの版で残っている。(MHA) そこにはアドルノが付け加えた3ページのタイプ印字の「テーゼ7の覚書」が残っている。それは46年9月4日という日付で彼が手書きしたものである。アドルノの遺稿には、この章についてのもっと他の資料は見つからない。



- 3) Anson Rabinbach, "Warum sind die Juden geopfert worden?" die Rolle des Antisemitismus in der Dialektik der Aufklärung, in : Gertrud Koch (hrsg.) *Bruchlinien*, 1999, Köln, S.132
- 4) Rolf Wiggershause, *Die Frankfurter Schule*, 1988, München, S.346
- 5) Ebenda. S.347
- 6) Th.W.Adorno, *Gesammelte Schriften* (以下 *GS*) 10-2, Frankfurt a. M., S.722
- 7) Th.W.Adorno, *GS20-1*, S.372
- 8) Th.W.Adorno, *GS10-2*, S.722
- 9) Th.W.Adorno, *GS3*, S.197, 198 徳永恂訳『啓蒙の弁証法』岩波書店 1990 273, 274 頁 (岩波文庫版では 361, 362 頁)
- 10) Max Horkheimer, *GS17*, S.465, 463
- 11) Th.W.Adorno, *Frankfurter Adorno Blaetter* Ⅷ, Rolf Tiedemann (hrsg.), 2003
- 12) Th.W.Adorno, *GS3*, S.192 徳永訳 265 頁 (文庫版 351 頁)
- 13) Ebenda. S.198 徳永訳 274 頁 (文庫版 363 頁)
- 14) Max Horkheimer, *GS12*, S.587
- 15) Th.W.Adorno, *GS3*, S.194 徳永訳 268 頁 (文庫版 355 頁)
- 16) Ebenda. S.201 徳永訳 278 頁 (文庫版 367 頁)
- 17) Ebenda. S.202 徳永訳 279 頁 (文庫版 368 頁)
- 18) Ebenda. S.203 徳永訳 281-282 頁 (文庫版 372 頁)
- 19) Ebenda. S.203 徳永訳 282 頁 (文庫版 372 頁)
- 20) Max Horkheimer, *Diskussionen zu den >Elementen des Antisemitismus< der Dialektik der Aufklärung*, *GS12*, S.590
- 21) Th.W.Adorno, *GS3*, S.213 徳永訳 296 頁 (文庫版 388 頁)
- 22) Ebenda. S.214 徳永訳 297 頁 (文庫版 391 頁)
- 23) Ebenda. S.212 徳永訳 293 頁 (文庫版 386 頁)
- 24) Ebenda. S.217 徳永訳 300 頁 (文庫版 395 頁)
- 25) Ebenda. S.212 徳永訳 294 頁 (文庫版 387 頁)
- 26) Ebenda. S.225 徳永訳 311 頁 (文庫版 408 頁)
- 27) Ebenda. S.226 徳永訳 312 頁 (文庫版 410 頁)
- 28) アドルノは『権威主義的パーソナリティ』の単独執筆章で、「個性」が消失するこうした選挙リストの基本的考え方を「チケット思考 ticketsthinking」として特に取り上げている。
- 29) Ebenda. S.227 徳永訳 313-314 頁 (文庫版 412 頁)
- 30) Ebenda. S.231 徳永訳 319 頁 (文庫版 419 頁)
- 31) Ebenda. S.233 徳永訳 321 頁 (文庫版 421 頁)
- 32) Anson Rabinbach, "Warum sind die Juden geopfert worden?" die Rolle des Antisemitismus in der "Dialektik der Aufklärung", in: Gertrud Koch (hrsg.) *Bruchlinien*, 1999 Köln, S.137
- 33) Th.W.Adorno, *GS3* S.87 徳永訳 98 頁 (文庫版 142 頁)
- 34) Ebenda. S.80 徳永訳 88 頁 (文庫版 129 頁)
- 35) Ebenda. S.211 徳永訳 292 頁 (文庫版 385 頁)
- 36) Max Horkheimer, *GS16*, S.761
- 37) Ebenda. S.763

- 38) Rolf Tiedemann (hrsg.), *Frankfurter Adorno Blaetter* VIII, 2003, S.85
- 39) Max Horkheimer, ebenda. S.763
- 40) Die Stellung der >Dialektik der Aufklärung<. Bemerkungen zu Autorschaft, Entstehung, einigen theoretischen Implikationen und späterer Einschätzung durch die Autoren, Max Horkheimer, *GS 5* の編者後書き。『啓蒙の弁証法』の頭書には, "Für Friedrich Pollock" の献辞が記されている。
- 41) Friedrich Pollock, Die gegenwärtige Lage des Kapitalismus und die Aussichten einer planwirtschaftlichen Neuordnung, in: *Zeitschrift für Sozialforschung, Jahrgang 1, 1932, Heft 1/2*, S.8-27, Bemerkungen zur Wirtschaftskrise, in: *Zeitschrift für Sozialforschung, Jahrgang 2, 1933, Heft 3*, S.321-354
- 42) Friedrich Pollock, State Capitalism: Its Possibilities and Limitations, in: *Studies in Philosophy and Social Science, Jg.9*, 1941,
- 43) Max Horkheimer, *Autoritärer Staat*, in: *GS5* S.293ff
- 44) Max Horkheimer, *GS12*, 1943, 全集編者の Gunzelin Schmid Noerr によれば, この論文の最初の原稿は 1943 年に執筆され, そのタイプ原稿をホルクハイマーはマルクーゼ (Herbert Marcuse), キルヒハイマー (Otto Kirchheimer) ノイマン (Franz L. Neumann) に渡し, その年の 11 月にホルクハイマーは, ポロックに最終原稿を仕上げる計画を手紙で書いている。けれどもこの論文は公刊されなかった。その理由はわからないが, 論文の一部, 全体の約三分の一は *Zur Kritik der instrumentellen Vernunft* の "Aufstieg und Niedergang des Individuums" に収められている。
- 45) 『啓蒙の弁証法』のためのメモに, ホルクハイマーは "Die Rackets und der Geist" を遺している。Max Horkheimer, *GS12*
- 46) Max Horkheimer, *Die Rackets und der Geist*, *GS12*, S.287
- 47) Max Horkheimer, *Zur Soziologie der Klassenverhältnisse*, *GS12*, S.87
- 48) Ebenda, S.103

(井上 純一, 立命館大学特任教授)

## Antisemitismusforschung von Th.W.Adorno/Max Horkheimer Logik der “Elemente des Antisemitismus”

Die vorliegende Arbeit entsteht aus dem Nachdenken über das Kapitel „Elemente des Antisemitismus“ in „Dialektik der Aufklärung“. Dieses Kapitel ist als dem theoretischen Teil des Antisemitismus-Projekts geschrieben, dessen Ergebnis wir einfach in dem Buch „Authoritarian Personality“ finden. Das Elemente-Kapitel baut die Brücke zwischen die Philosophie von „Dialektik der Aufklärung“ und die empirische Forschung von „Authoritarian Personality“.

Die sieben Thesen konstruieren dieses Kapitel: der falsche Charakter des bürgerlichen Subjekts (1.These), die sozialen und ökonomischen Gründe des Antisemitismus (2.und3.These), die Bedeutung der Religion in der Gesellschaft (4.These), die Idyosynkrasie (5.These), die falsche Projektion (6.These) und das Ticketdenken (7.These). Diese sieben Thesen sind systematisch nicht beschrieben und haben keine Beziehung miteinander. Deshalb zeigen sie uns stillschweigend die Schwierigkeit der Auflösung des Antisemitismus.

Das Ticketdenken zeigt die Auswechselbarkeit der Opfer. Die Liste der Opfer ist auswechselbar, wenn man tauschen will. Es begründet die Hoffnung, daß der Antisemitismus als Posten im auswechselbaren Ticket vorkommt. Darin finden Adorno/Horkheimer die schwächste Hoffnung.

Das sind zwei verborgene Strömungen in ihrem Denken. Eine ist der archaische Ursprung des Antisemitismus, andere ist die neue Struktur des Antisemitismus. Adorno/Horkheimer schreiben Odysseus als der archaische Ursprung des bürgerlichen Subjekts. Sie finden die Spur der wandernden Juden in Odysseus. Das zeigt den verlorenen menschlichen Wunsch der Nicht-Arbeit. Antisemitismus entspringt aus dieser Spur. Andere Strömung konstruiert neue Sozialstruktur. Sie benutzen die Terminologie „Clique“, „Racket“ anstelle der Klasse. Besonders stützt Horkheimer stark auf Pollocks Staatskapitalismus und behauptet diese neuen Begriffe. Dadurch zeigen sie die Kompliziertheit der herrschenden Ordnung.

(INOUE, Junichi, ausserplanmäßiger Professor der Ritsumeikan Universität )